

『女性史と私』

32丁 小石 房子さん
(古宮)



私は今年89才になりました。私が女性史を書き始めたのは40代半ばですが、童話作家からの出発でした。

終戦の翌年、4年生の国語の教科書でアインデルセンの『みにくいアヒルの子』に出会い、戦時中、外国の物は敵性とよばれて目にする事ができなかつたので、心を奪われて童話作家に憧れたのです。

合い結婚が定番で、「妻は夫に従う」という家訓にしばられて、童話を書くことはできませんでした。

私がお見合いではなく、夫は映画会社で映画をつくる仕事をしていたので理解があり、子供を産んでからも童話を書き続けることができました。そして夫の友人の作家南原幹生さんの紹介で、ポプラ社から『聖徳太子』を上梓すると、女性史をす

すめられたのです。国連が昭和50年を国際婦人年として世界に男女平等を呼びかけたため、日本では女性史が書かれるようになったからです。

日本は男尊女卑の国で、男子は家の跡取りになり、女子は良家に嫁して跡取りの男子を産むことが理想とされて、嫁入りを片付けると言い、冠婚葬祭の席次も男子が上座で、女子は下座が決まりでした。

それで私は日本を男女平等の国にするために女性史を書くことを決意し、2年間取材をして『人物日本の女性史100話』を上梓します。

すると講演依頼があり、受講の希望者が殺到したため、企画会社がカルチャー教室を設けて月に一度の女性史の講座が始まりました。そして取材で出会った女流人が記録に残る流人の第一号だったので、5年間取材をして『流人100話』を上梓します。

すると受講生の希望で取材先をたずねる「歴史の旅」が始まり、旅は人

気でコロナ禍で中止になる令和元年まで31回を数えました。

また100話シリーズを2冊上梓したので歴史小説をす

められ、『豊後の王妃イザベル』から16冊書きますが、平成の歴史ブームの追い風を受け

て、共著や新書や月刊誌の執筆に追われ、過労のために二度ダウンします。それで三度目のダウンを懸念して、3年前、人生を振り返って『男子にあらざるば子供にあらざる 女性史と私』というエッセイを書きました。

私は日本を男女平等の国にするために女性史を書き、31年間女性史の講座を

つづけてきました。が、男尊女卑は変わりません。それでお願いがあります。それは女帝の容認です。日本は皇国で戦後天皇は国主から国の象徴とされ、憲法も改訂されて男女同権となりました。でも皇室典範は改訂されず、女性天皇は禁じられたままで、世界のジェンダーシッ



2015年 石川県七尾市の隠れキリシタンの寺「本行寺」にて

プ(男女格差)は百位以内に入ったことがなく、2024年に国連の女性差別撤廃委員会から皇室典範の改定を勧告されました。

しかし政権は拒否して、皇統は「伝統の男系男子」を維持しているのです。男系男子は遣唐使が「日本」という国号とともに持ち帰った女帝を禁じた唐の王制で、日本の女帝は皇位の中継ぎとされました。

女帝が容認されなければ男女平等の国とは言えず、私たち女性が声を上げなければ、女帝は容認されないでしょう。

私は今、最後の本『昭和の母と娘たち』を執筆中です。

私は昭和30年に国文科に入学し、那須辰造先生が主催する童話の創作グループ(メールヘンサークル)に入会しました。すると先生は「よい作品を書きたいなら、結婚をして子供を産んで育てなさい」と言われたので、60人の会員は次々に結婚をして子供を産みました。でも当時は見

No.34

生を訪ねて